

## ミネアポリス美術館 日本絵画の名品

サントリー美術館(六本木) 2021.04.14~06.27 福井・滋賀を巡回

アメリカ合衆国ミネソタ州の「ミネアポリス美術館」は、1883年に開館した中西部で最大の総合美術館で、入場料無料、写真撮影も自由の開かれた姿勢が特徴で、コレクションは世界各地の絵画、版画、素描、彫刻、建築、装飾など多岐にわたる美術品およそ10万点を所蔵している。特に、アジアの美術品については、国内では最も良質で包括的なコレクションと評され、その内日本絵画は「約2,500点の浮世絵」を筆頭に、質・量ともに高く評価されている。

本展は、当館が所蔵する日本美術の収集品から厳選した作品を通して、中世から近代に至る日本絵画の変遷を一挙に公開する企画としての展示である。

その内容は、「水彩画・狩野派・やまと絵・琳派・浮世絵・文人画・奇想・近代絵画」と日本絵画の主要作品を網羅するという構成となっている。

東洲斎写楽《市川蝦蔵の竹村定之信》 大判錦絵 1794年 江戸時代



「東洲斎写楽」は、生没年不詳の江戸時代中期の浮世絵師で、10か月程の短期間に役者絵などを版行した後、忽然と画業を絶って姿を消した謎の絵師として知られる。

本作品は、「定之信」が上下(袴：かみしも)姿で切腹する場面と推定され、両手を揉み合わせているかのような動きは、相手におもねる仕草とも見えるが、一方、口元には決死の覚悟を見ることができる。市川蝦蔵の前名は「五代目市川団十郎」で、江戸歌舞伎の美意識を体現する名優であった。

狩野山雪 《群山図襖》(旧天祥院客殿襖絵) 1946年 江戸時代

